

小 学 校

平 成 16 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

家

庭

東 京 都 教 職 員 研 修 セ ン タ ー

目 次

目次	1
研究主題設定の理由	2
研究の構想図	3
研究の内容	
1 実態調査	4
2 研究主題を実現するための手だて	8
3 実践事例	
第5学年 [ワクワク ドキドキソーイング]	11
○ミシンにチャレンジ！ 事例1	14
○ミシンでソーイング！ 事例2	18
事例3	21
研究のまとめと今後の課題	24

**児童一人一人が確かな学力を身に付け、
学ぶ喜びや楽しさの実感できる指導法の工夫**
—自らの力で学ぼうとする児童の育成を通して—

研究主題設定の理由

今、児童を取り巻く家庭生活は、社会の発展や保護者の価値観が多様化していることなどで、急速に変化している。求めれば豊富な情報を速やかに手に入れることができ、家族独自の好みに応じた家庭生活をつくることができる。また、お金を出せば簡単に便利さやものの豊かさを手に入れることができることで、家庭生活の家事等にかかわる時間が短縮し、家族の共通の時間や家族一人一人の時間を確保することができるという利点も生まれている。

しかし、一方では、豊富に情報が手に入るがゆえに、本当に必要な情報を取捨選択することが難しい状況が見られる。また、便利さやものの豊かさによって、これまで受け継がれてきた家庭生活を営む上での生活技能や手作りのよさが失われていく傾向も見られる。

こうした状況から、家庭科の学習活動においては、児童が情報の真価を判断できないまま安易に情報を選択してしまうなどの一面が見られる。また生活様式の変化とともに、児童は、日常生活の中で培われてきた生活技能を身に付ける機会や手作りのよさを感じる機会が少なくなっている。

本研究を進めるに当たり、研究員所属小学校の児童(第5学年420名、第6学年424名)の実態調査を行った結果、80%以上の児童が家庭科の授業を楽しみにし、衣食住に関わる何かを作ってみたいという願いをもち、家庭科の学習に対する学ぶ喜びや楽しさを実感することを期待していることが分かった。

したがって、児童一人一人の願いを実現するためには、家庭生活を営む上での基礎的な知識や技能を身に付けさせることが必要である。また、その願いの実現には、児童の課題解決の仕方を見直し、自らの力で学ぼうとする意欲や学び方を身に付けた主体的な学びに転換することが大切である。

そこで、本研究では、「確かな学力」を基礎的な知識や技能、学ぶ意欲、学び方としてとらえ、研究主題を「児童一人一人が確かな学力を身に付け、学ぶ喜びや楽しさの実感できる指導法の工夫 - 自らの力で学ぼうとする児童の育成を通して - 」とした。

本研究における家庭科の学習に関する実態調査では、児童が授業が「分かる」と認識できる状況や、学習につまずいた時にどのような手だてを取るのかの実態を把握した。

そして、毎時間の児童のつまずきを予測し、そのつまずきを自らの力で主体的に取り組み解決を目指す児童の姿を「学びの自立」と捉え、『自力解決プログラム』を構築した。さらに、その学習のつまずきや、主体的な解決を行う手助けとなる教材・教具、学ぶ意欲や喜びが実感できる評価の工夫について取り組むことにして、本主題を設定した。

研究の構想図

家庭科で育てたい力

教科の目標

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てる。

研究の項目

内容(3) アイウ

学年の目標(第5学年及び第6学年)

- (1) 衣食住や家庭生活などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活を支えているものが分かり、家庭生活の大切さに気付くようにする。
- (2) 製作や調理など日常生活に必要な基礎的な技能を身に付け、自分の身の回りの生活に活用できるようにする。
- (3) 自分と家族などとのかかわりを考えて実践する喜びを味わい、家庭生活をよりよくしようとする態度を育てる。

社会的・家庭的背景

- ・保護者の価値観が多様化している。
- ・情報が豊富である。
- ・便利なものが容易に手に入ることで、生活時間の効率化を図ることができる。

児童の実態

- ・衣・食に関わる実践的・体験的な学習活動を好み、意欲的に取り組む。
- ・自分らしさを生かせる物を作りたいと願っている児童が多い。
- ・情報化社会の中で本当に欲しい情報の取捨選択が難しい。
- ・生活技能を身に付ける機会が少ない。
- ・手作りのよさを体験したり、実感する機会が少ない。
- ・自ら調べたり、確認したりする自立した学習が苦手である。

教師の願い

- ・基礎・基本の力を身に付けてほしい。
- ・自分で学ぶ意欲をもってほしい。
- ・学び方を身に付けてほしい。
- ・分かったとき、できたときの喜びを味わってほしい。
- ・身に付けた力を生活に生かしてほしい。

育てたい児童像

- ・日常生活に必要な基礎的な知識や技能を身に付けている子
- ・主体的な学びを通して、自らの力で課題を解決することができる子
- ・学んだことを生かし、よりよい生活を工夫することで、学ぶ喜びや楽しさを実感できる子

研究主題

**児童一人一人が確かな学力を身に付け、
学ぶ喜びや楽しさの実感できる指導法の工夫
—自らの力で学ぼうとする児童の育成を通して—**

仮説

児童が自らの力で課題解決を行うための個に応じた指導法を工夫し、その指導に伴う教材等の工夫をすることで、確かな学力が身に付き、学ぶ喜びや楽しさを実感させることができるであろう。

育てたい児童像を実現するための手だて

- ・児童が自らの力で学習を進めていくことができる指導法の工夫
- ・学習のつまずきを克服する手助けとなる教材・教具の工夫
- ・児童の学ぶ過程の評価方法の工夫と学ぶ意欲や喜びが実感できる自己評価の工夫

研究実践

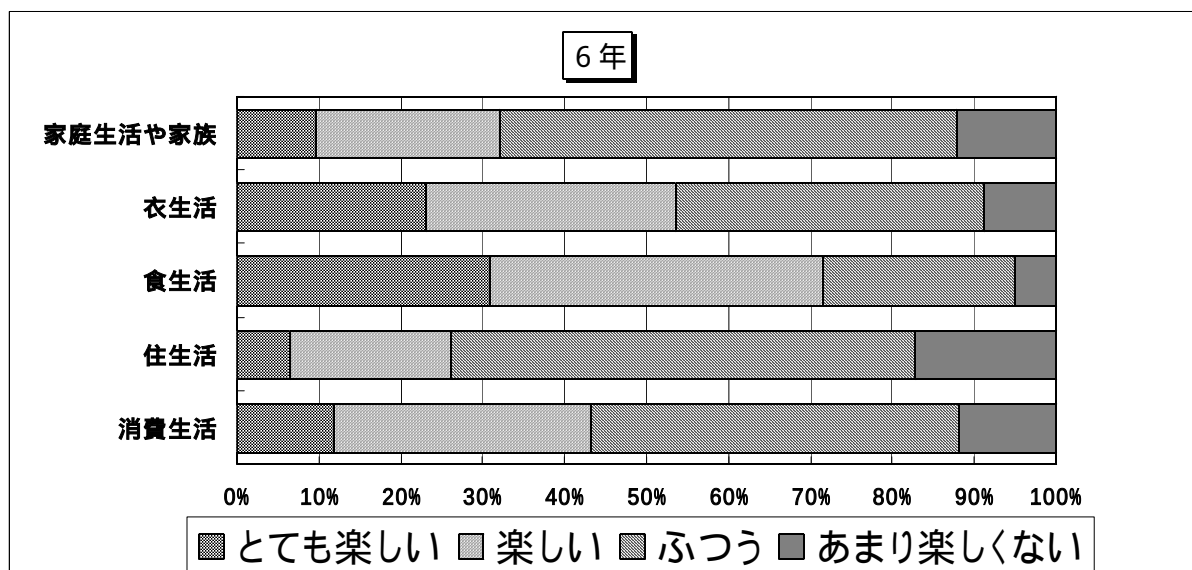
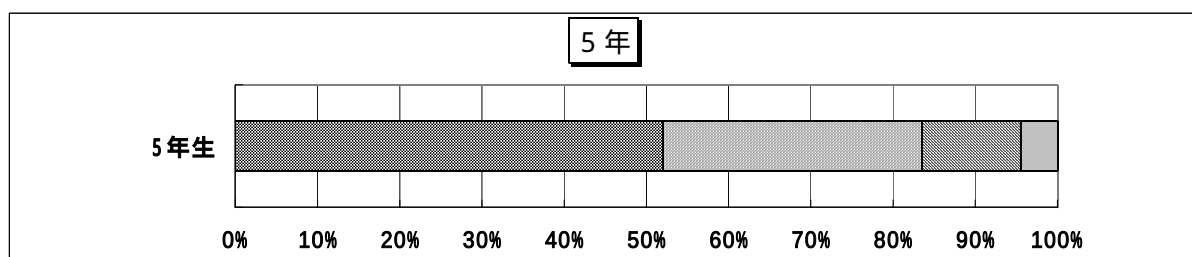


研究の内容

1 実態調査

- (1) 目的 授業中の児童の学習実態について調査することにより、児童が授業が「分かる」と認識できる状況や学習につまずいた時にどのような手だてを取るかの実態を把握し、指導法の工夫・改善に役立てる。
- (2) 時期 平成16年7月中旬
- (3) 対象 研究員所属小学校の児童 第5学年420名 第6学年424名
- (4) 方法 質問紙法
- (5) 内容と結果及び考察

質問1 家庭科の学習が楽しいですか



< 結果 >

5年生では、家庭科の授業を「とても楽しい」、「楽しい」と答えた児童は、80%を超えていることが分かった。6年生では、5年生からの既習の家庭科の内容も含めて、家庭科の学習内容の中で、楽しいと思える学習内容を調査したところ、食生活についての学習が「とても楽しい」、「楽しい」と答えた児童が71%、衣生活についての学習が「とても楽しい」、「楽しい」と答えている児童が53%と上位を占めた。

質問2 家庭科の学習の中でどんなとき授業が楽しいと思いますか

(%) <複数回答可>

質 問 項 目	5 年	6 年
作品が完成したとき	7 6	7 7
自分の作りたいものが作れたとき	7 4	7 3
何かを作っているとき	6 8	6 1
分かったときやできたとき	5 2	5 1
先生にほめてもらったとき	4 8	4 1
友達にほめてもらったとき	3 1	3 0
友達に教えてもらったとき	2 5	2 6
友達に教えてあげているとき	1 8	1 6

< 結果 >

家庭科の学習では、5年生、6年生共に「作品が完成したとき」や、「自分の作りたいものが作れたとき」、「何かを作っているとき」に楽しいと答えた児童が60%以上と上位を占めた。このことから、児童は、家庭科の学習の中では、実習や製作活動を通して、楽しさを実感していることが分かった。

また、児童は、授業の中で、先生にほめられることで楽しさを実感できると答えた児童が、5年生は48%、6年生は41%を占めていることから、「ほめる」ことが学習の楽しさや意欲につながることを改めて認識した。

< 質問1・2の考察 >

質問1での5年生の調査は、本調査を7月上旬に実施したことから、家庭科の学習をはじめて3ヶ月の状況の中では、「家庭科の学習が楽しいですか」という問いのみの把握にとどまり、学習の内容ごとの「楽しさ」を調査することはできなかった。しかし、研究の始めの時点で、家庭科の授業にどの程度学ぶ楽しさを実感できているかを把握し、児童の学ぶ過程での変容が見とれるようにしたいと考えた。

また、児童は、家庭科の学習では、食生活や衣生活の授業で楽しさを実感し、さらにその楽しさは、作品が完成したことでの達成感、自分の作りたいものが作れた成就感、製作の過程での充実感を味わうことによって得られるものであるととらえることができる。

したがって、児童の「何かを作ってみたい」という思いを実現するために必要な基礎的な知識や技能を確実に身に付けさせ、達成感や成就感、充実感を味わわせることによって、学ぶ楽しさを実感させることが必要である。

また、半数近くの児童が先生にほめられることで、授業が楽しいと実感できることから、学ぶ過程の評価の工夫と学ぶ意欲や喜びが実感できる評価の工夫をすることが求められている。

質問3 授業の内容が分かった（理解できた）
 と思えるのは、どんなときですか

（％）＜複数回答可＞

質 問 項 目	5年	6年
先生が見本などテレビやスクリーンに映して説明をするとき	53	35
先生のそばに集まって実演を見るとき	49	58
先生が黒板を使って説明をするとき	35	26
友達に教えてもらうとき	28	28
実物見本を見て確かめるとき	26	26
先生に一对一で説明を聞くととき	25	28
先生がプリントや教科書を使いながら説明をするとき	20	19

＜結果及び考察＞

5年生では、教師が視聴覚機器を使って説明したり、教師の実演を見たりすることによって授業が分かるとの回答が上位を占めている。6年生では、教師の実演を見ることによって授業が分かるとの回答が上位を占めている。このことから、視聴覚機器や教師の実演が効果的である

ことが再確認された。したがって、教師の実演の効果的な導入や、視聴覚機器や板書等の教具の有効な活用について検討していく必要があると考えた。

また、実物見本を見て分かった児童が、5年生、6年生ともに26％となっていることから、児童が必要とする資料の再検討と、その資料等の内容が児童にとって分かりやすい内容かどうかの見直しが必要である。さらに、児童は積極的に資料等を活用して理解するという主体的な学び方が身に付いていないのではないかと推測できる。したがって、教師や友達に教えてもらうだけでなく、自らの力で資料等を活用して調べるなどの主体的な取り組みや解決のできる児童を育成する指導方法を工夫する必要がある。

質問4 家庭科の学習で（何をするのか・どのようにやるのか）
 分からないことがあるのはどんなときですか

（％）＜3項目選択＞

質 問 項 目	5年	6年
先生が黒板を使って説明しているとき	26	25
作品を作っているときや調理しているとき	26	31
先生が教科書やプリントを使いながら説明しているとき	24	34
計画を立てているとき	21	35
調べ学習をしているとき	20	26

＜結果及び考察＞

5年生は、「先生が黒板を使って説明しているとき」と「作品を作っているときや調理をしているとき」が上位を占め、6年生では、「計画を立てているとき」と「先生が教科書やプリントを使いながら説明しているとき」が上位を占めた。

と「先生が教科書やプリントを使いながら説明しているとき」が上位を占めた。

このことから、「計画を立てているとき」に分からないことがあるということは、学習の見通しが立たないことによってつまずきが発生していることが予測できる。

また、「先生が黒板を使って説明しているとき」や「先生が教科書やプリントを使いながら説明しているとき」に分からないことがあるということは、教師の指導方法の改善、板書計画の見直し、分かりやすい教材の工夫・改善とともに、資料を読み取る力を育て、自立した学びになるよう指導していく必要性がある。

さらに、「作品を作っているときや調理をしているとき」に分からないことがある場合は、児童に課題を解決する自力解決力が身に付いていれば、学習のつまづきを主体的に解決したことと、学ぶ喜びや楽しさを実感させることができると考えられる。

質問5 家庭科の学習中に分からないこと

または、できないことがあったときどうしますか

(%) <複数回答可>

質 問 項 目	5年				6年			
	1 番 目	2 番 目	3 番 目	4 番 目	1 番 目	2 番 目	3 番 目	4 番 目
友達に聞いたり やったりするのを見る	5 4	2 4	8	5	6 4	1 9	8	3
先生に聞いたり 実演 してもらったりする	2 9	3 5	1 6	6	2 1	4 1	1 7	9
教科書やプリントを 見たり調べたりする	1 0	2 0	2 7	1 2	9	2 6	2 9	1 3 %
家庭科室にある資料を 見たり調べたりする	1	1 2	2 0	1 8	3	8	2 4	2 1
そのまま	3	2	4	7	3	3	4	8
その他	1	1	1	1	0	1	2	1

< 結果及び考察 >

5年生6年生共に、授業中分からないことがあるときの解決の仕方は、友達に聞いたりやったりするのを見る 先生に聞いたり実演してもらったりする 教科書やプリントを見たり調べたりするの順になっている。

児童が学習につまずいたときにとる手だてとして、「友達に聞いたりやったりするのを見る」が、5年生、6年生ともに1番に挙げられたことから、児童相互の学び合う状況ができていることが分かる。

しかし、質問3で「友達に教えてもらうとき」に分かったと認識できる児童は、5年生、6年生共に28%に留まっていることから、友達に聞いても理解できたかどうかについては疑問である。課題としては、児童の中には、安易に人に聞いて解決してしまうことで、じっくりと考えたり、調べたりする力の育成が阻まれてしまうことも考えられる。

そこで、学習のつまづきが発生した場合に、児童が自らの力で、主体的に解決を目指す児童の姿を「学びの自立」ととらえ、資料等を活用して調べ、確認する学び方を定着させることや、児童相互の効果的な学び合いを計画的に設定することが求められると考える。

以上の調査結果及び考察から、「児童が自らの力で課題解決を行うための個に応じた指導法を工夫し、その指導に伴う教材等の工夫をすることで、確かな学力が身に付き、学ぶ喜びや楽しさを実感させることができるであろう。」という仮説を立て、研究を進めることにした。

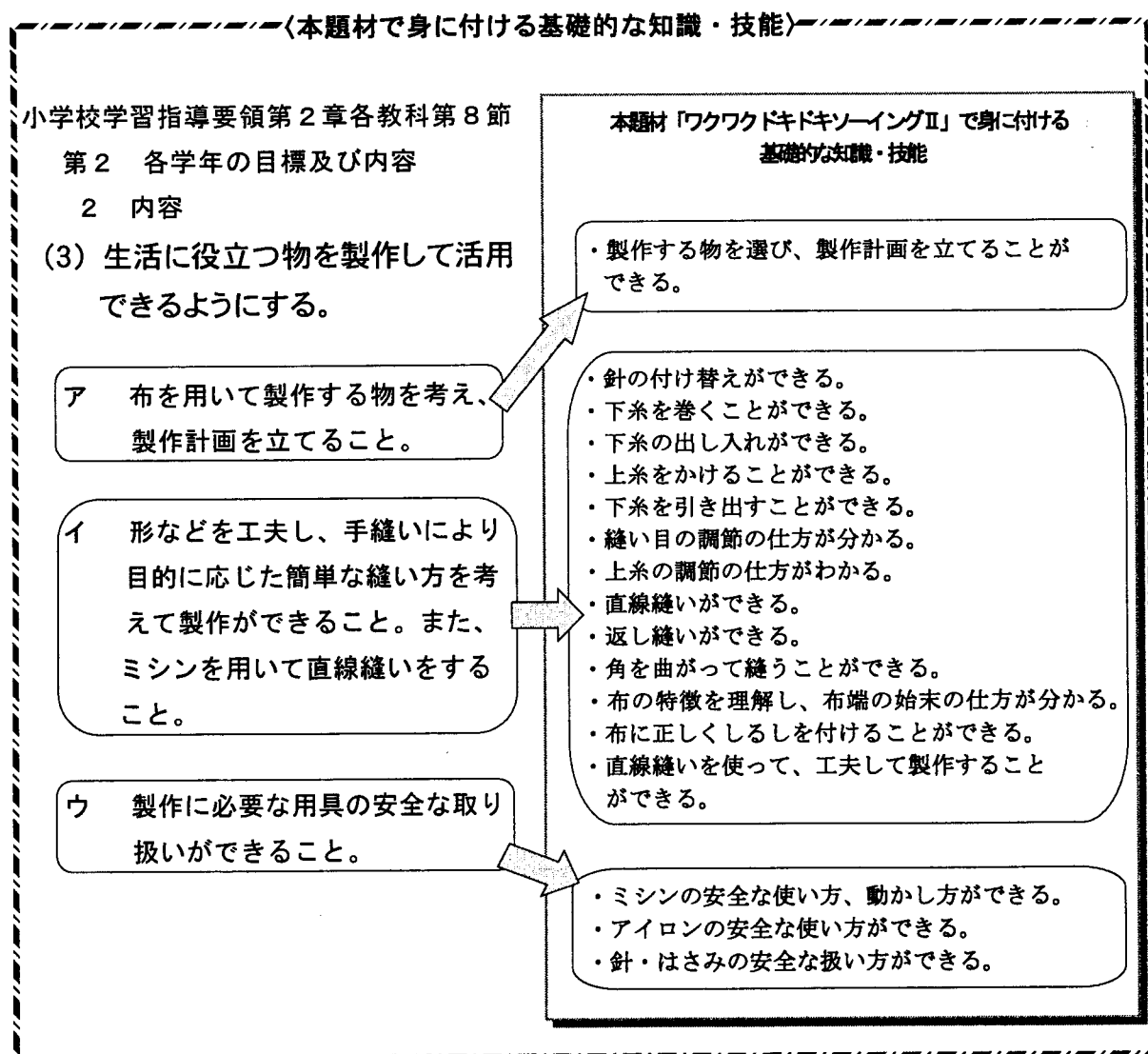
2 研究主題を実現するための手だて

本研究を進めるに当たり、「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（中央教育審議会答申 平成15年10月7日）」を参考にし、「確かな学力」とは、知識や技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含むものであることを理解した。それを踏まえて、本研究での「確かな学力」を、基礎的な知識・技能、学び方、学ぶ意欲に焦点化した。

したがって、仮説「児童が自らの力で課題解決を行うための個に応じた指導法を工夫し、その指導に伴う教材等の工夫をすることで、確かな学力が身に付き、学ぶ喜びや楽しさを実感させることができるであろう。」に基づき、児童が自らの力で課題解決を行うための個に応じた指導法を『自力解決プログラム』として構築した。また、その指導法に伴う教材等の工夫と、児童の学ぶ過程の評価の工夫や学ぶ意欲や喜びが実感できる評価の工夫に取り組んだ。

以下に本研究の扱う題材の基礎・基本を明確にした上で、指導法の工夫、教材・教具の工夫、評価の工夫の3つの視点で、研究主題を実現する手だてについて述べる。

本研究では、小学校学習指導要領の内容を踏まえて、本題材で身に付ける基礎的な知識・技能を明らかにすることが求められていることから、下図のように考えた。



(1) 指導法の工夫

児童一人一人が「確かな学力」を確実に身に付けるためには、つまずきを予測し、個に応じた学習指導計画をより一層充実させる必要がある。それには、個性をより一層伸長する工夫と、これまでの児童の課題解決の仕方を見直し、児童の「学びの自立」を形成していく『自力解決プログラム』を構築し研究を進めた。

『自力解決プログラム』

作成の目的

ア 児童の主体的な学習を形成する。

イ 学習のつまずきを予測し、個に応じた指導を充実する。

ウ 児童一人一人の基礎的な知識や技能の確実な定着を図る。

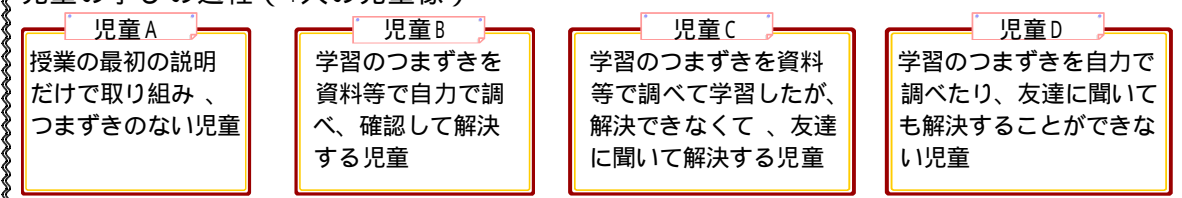
エ 発展的な課題を提示し、取り組むことによって、個を生かし伸ばす指導を充実する。

オ 児童相互の学び合いを高める。

特徴とその活用

○つまずきに対応した指導計画の工夫

児童の学びの過程（4人の児童像）

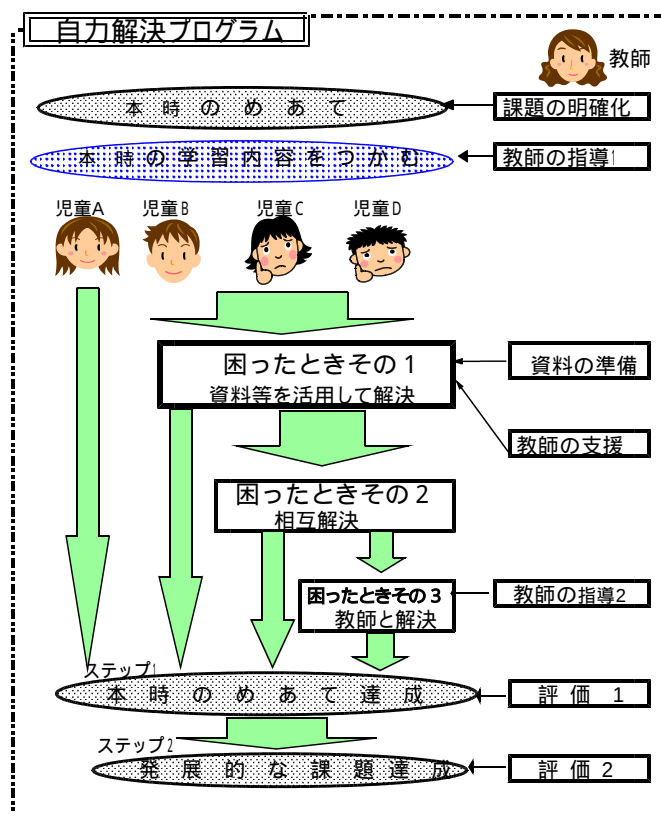


本題材では、毎時間のめあてに沿って、4人の児童像を設定し、学びの過程をとらえている。

教師は、小題材ごとに本時のめあてに沿って、児童のつまずきを予測し、そのつまずきに対する適切な指導・支援を工夫して、指導計画を立てる。そして、そのつまずきを児童が主体的に解決するために有効な資料等の準備をする。

○解決のためのステップの設定

実態調査から、課題として、児童の中には、安易に人に聞いてつまずきを解決してしまうことで、じっくりと考えたり、調べたりする力の育成が阻まれてしまうことも考えられる。そこで、学習のつまずきが発生した場合に、意図的に一人で取り組ませることを強調する。



児童には、学習につまずいたときには、身近な資料を見てチャレンジしよう できている友達に見せてもらったり、教えてもらおう 先生にもう一度教わろう の順序で解決するステップ「困ったときの１・２・３」の名称を用いて指導し、分からないままにしないようにさせる。このステップを毎時間の授業で活用することで「学びの自立」を確率し、基礎的な知識や技能を確実に身に付けることができる。と考える。

○発展的な課題の設定

児童の個性をより一層伸長させられるよう、発展的な課題を設定した。このことにより児童が学習への意欲を高め、充実感を味わわせることができる。また、発展的な課題は、基礎的な知識・技能を活用して取り組める内容になるよう工夫する。

(2) 教材・教具の工夫

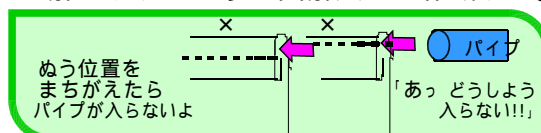
「お助けカード」

「お助けカード」は、１つに児童の学習のつまずきを予測して、基礎的な知識や技能を習得するために必要な事項を説明図や段階標本として作成し、基礎的な知識や技能の確実な定着を図るために活用させる。２つに、児童が学習活動の中で主体的に調べたり、確認することができる資料として作成し、児童が自らの力で課題解決を行うための個に応じた教材として活用させる。

また、説明図や段階標本の作製方法としては、資料の読み取りの苦手な児童への対応として、情報量を最小限にし理解する内容を焦点化するように工夫する。

「製作カード」

作品の製作方法を解説するカードとして、児童が理解しやすいように図解入りで作成する。その解説には、つまずき例を載せ、つまずきから適切な知識や技能の習得を理解させるよう工夫する。



(3) 評価の工夫 <自己評価の工夫>

「学習カード」では、評価規準に基づいた自己評価の判断の視点を示し、児童のめあて達成の尺度を明らかにする。また、その視点に基づいて本時の学習を振り返られるように自己評価欄を設ける。

また、つまずいたときにとる手だてとして、「資料 資料を見た」「友達に聞いた」「先生にもう一度教えてもらった」を振り返り欄に設ける。このことは、児童に、安易に人に聞いて解決していた方法を、自力で解決する主体的な解決方法に転換することをねらいとする。

	学 習 す る こ と	今日のめあて	学習を振り返って			
			自己評価	つまずいたときにとった手だて		
1	ミシンの出し方・しまい方	/		資料	友達に聞いた	
2	ミシンの安全な操作	/		資料	友達に聞いた	
3	針のつけかえ方	/		資料	友達に聞いた	
か	直線 ぬい始め	/		資料	友達に聞いた	

今日のめあて（ステップ１）
できた。 まだできない

先生の説明だけでできた

資料 資料を見た

友達に聞いた

先生にもう一度教えてもらった

3 実践事例

(1) 題材名 第5学年 『ワクワクドキドキソーイング』

(2) 題材について

5年生の児童は、初めて学ぶ家庭科に興味をもち、1学期は手縫いの基礎や小物作りなどに積極的に取り組んできた。

小学校及び中学校の学習指導要領では、ミシン縫いの技能を全員が必修という形で学べるのは小学校だけになることもあり得ることから、本題材では、ミシン縫いの技能を確実に身に付けさせ、その技能を生かして布を使った簡単な物を製作することにより、作る楽しさを実感させたいと考えた。そして、手作りのよさを見直す機会にもつなげたい。

また、本題材を通して、『自立解決プログラム』によって主体的な「学び方」を定着させ、身に付けさせることもねらいとしている。

(3) 題材の目標（評価規準）

観点	評価規準
家庭生活への 関心・意欲・態度	・進んでミシン縫いの操作を身に付けようとしている。 ・布を使った簡単な物の製作に関心を持ち、生活に役立てようとする。
生活を創意工夫する 能力	・ミシン縫いの縫い方を生かして、生活に役立つ物を自分なりに工夫して、製作することができる。
生活の技能	・安全で正しいミシンの取り扱いができる。 ・ミシン縫いを使って、目的に応じた縫い方ができる。
家庭生活についての 知識・理解	・安全で正しいミシンの扱い方を理解している。 ・布を使った簡単な物の製作の仕方と計画的な製作の仕方を理解している。

(4) 本題材の指導の工夫・改善

○指導法の工夫

・つまずきの予想と発展的な課題の明確化

本題材における事例1、2、3では、本時のめあてに沿って、予想されるつまずきの中から、(児童像の)B児・C児・D児の主なつまずきを下表のように予想した。

そこで、授業の全体指導では、この主につまずくと思われる内容を中心に、視聴覚器機の活用や教師の実演の工夫とともに、段階標本や実物見本を用意し、児童が学習内容を確認できるようにした。また、基礎的な知識や技能を生かして取り組める発展的な内容を下表のように設定することで、児童の学習意欲の喚起と個性の伸長を目指した。

事例	本時のめあて	予想されるつまずき	発展的な課題
事例1 ミシンにチャレンジ！ (6/7時間)	○直線ぬいをしよう	・上糸や下糸のセットができない。 ・釜に糸がからまる。	針目をかえてぬう
事例2 ミシンでソーイング！ (1/5時間)	○布はしの始末の仕方を覚えよう〔はしをほぐす、二つ折り(みみの場合)、三つ折り〕	・二つ折り、三つ折りの折り方が分からない。 ・縫う位置が分からない。	はしをほぐして二つ折りにしてミシンをかける
事例3 ミシンでソーイング！ (4/5時間)	○自分の学習計画を立て、製作しよう ・布のはしをぬおう ・もようを工夫しよう	・縫う位置が分からない。 ・布の折り方が分からない。	工夫してもようをつけることができる

・指導計画の工夫

指導計画を「ミシンにチャレンジ！」と「ミシンでソーイング！」の2つに構成した。
「ミシンにチャレンジ！」では、児童にミシン縫いの基礎的な知識や技能が身に付くように、
また、「ミシンでソーイング！」では、身に付けた基礎的な知識や技能を生かして作品を製作し、達成感や満足感が実感できるようにした。

製作に入る前に、布端の始末の仕方を学習する時間として1時間を設定した。この学習時間を設定することで、布端の始末の仕方を確実に身に付けられることと、布端の始末の仕方を練習した布が、児童の個人の資料として次の作品作りに活用できるように工夫した。

本題材の指導計画『ワクワクドキドキソーイング』（12時間扱い）

（関）…家庭生活への関心・意欲・態度 （創）…生活を創意工夫する能力

（技）…生活の技能

（知）…家庭生活についての知識・理解

時間	学習活動	評価規準	評価方法
ミシンにチャレンジ！ 7時間	1 2 ミシンと仲良くなろう！ ・ミシン縫いと手縫いの違いを比べ、ミシン縫いの利点を話し合う。 ・ミシンの出し方、しまい方、動かし方を調べ、練習する。	・ミシン縫いの特徴を理解する。（知） ・ミシンの操作に関心を持ち、ミシンの出し入れや動かし方が分かる。（関・知・技）	話合いの様子 活動の様子 学習カード 評価表
	3 4 できるかな？針の取り付け＆からぬい ・針のつけ方、はずし方を練習する。 ・から縫いをする。 直線縫い 縫い目の調節 角の曲がり方	・資料などを参考に、自分で調べながら、練習している。（関・創） ・針のつけかえができる。（技） ・糸を付けずにミシンを操作し、まっすぐに縫うことができる。（技） ・縫い目の調節をすることができる。（技） ・直角に角を曲がることことができる。（技）	練習用紙 学習カード 評価表
	5 6 覚えよう！下系の巻き方＆下系のセットの仕方 ・下系の巻き方を練習する。 ・下系の出し入れのしかたを練習する。	・下系の巻き方が分かる。（技） ・下系の出し入れができる。（技）	活動の様子 学習カード 評価表
	7 マスターしよう！上系のかけ方 ・上系のかけ方を練習する。	・上系を正しくかけることができる。（技）	活動の様子 学習カード 評価表
	8 9 できるかな？下系の引き出し方 ・下系を引き出す練習をする。 まっすぐぬおう！ ・直線縫いを練習する。事例	・下系を引き出すことができる。（技） ・安全に注意して、直線縫いができる。（知・技）	活動の様子 学習カード 評価表
	10 11 これでマスター！ミシンぬい ・返し縫いの練習をする。 ・上系の調節の仕方を覚える。	・返し縫いができる。（技） ・上系の調節の仕方が分かる。（知・技）	練習用布 活動の様子 学習カード 評価表
	12 覚えよう！布はしの始末の仕方 ・布端の始末の仕方を練習する。事例 ・作品作りの計画を立てる。	・布の特徴を理解する。（知） ・布端の始末の仕方がわかる。（知） ・製作に関心を持ち、進んで製作しようとしている。（関）	製作カード 練習用布 評価表
ミシンでソーイング！ 5時間	1 2 作品作りに挑戦！ ・しるしをつける。 ・縫う。事例 ・工夫して模様を付ける。	・製作する物の計画を立てることができる。（知・技） ・正しくしるしをつけることができる。（技） ・布端の始末ができる。（技） ・目的に応じた縫い方を考えたり、自分なりに工夫して製作することができる。（創）	活動の様子 作品 製作カード 評価表

○教材・教具の工夫

・「お助けカード」の工夫

学びの中で、児童のつまずきとして14項目を予測し、その視点で以下の「お助けカード」を作成した。

- ①針の取りつけ方 ②からぬいのしかた ③角の曲がり方
④下糸のまき方 ⑤下糸のセットのしかた ⑥上糸のかけ方
⑦下糸の引き出し方 ⑧ミシンぬいのセットのしかた
⑨ミシンが調子よくないときに確かめてみよう
⑩直線ぬいのしかた ⑪アイロンの使い方 ⑫はしをほぐす
⑬二つ折り ⑭三つ折り

角のまがり方

①まがる位置に針をさす

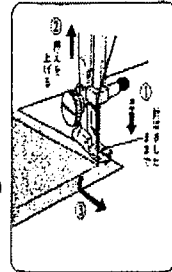
②おさえをあげる

③針をさしたまま

まがる方向に布の向きを変える

④おさえをおろす

⑤ふたたび ぬう



「お助けカード」の作成例：『角のまがり方』カード

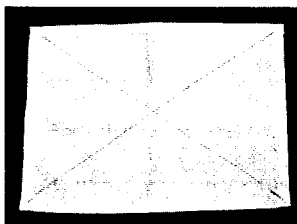
角の曲がり方の学習においては、〈曲がる位置に針をささずに曲がってしまう〉〈方向を変えた後におさえをおろさずに縫ってしまう〉の2点のつまずきが予測される。そこで、「お助けカード」には、つまずきやすい事項を強調し、児童に解決方法のポイントが明確に分かるように工夫した。

・視聴覚機器の活用

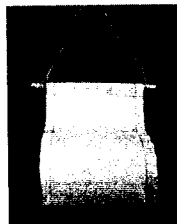
ミシン操作や製作についての説明は、児童が学習内容を確実に理解することができるように、教材などの拡大や、ミシン操作や製作の過程を実物投影機や教材提示装置を活用して提示した。

・3種類の作品

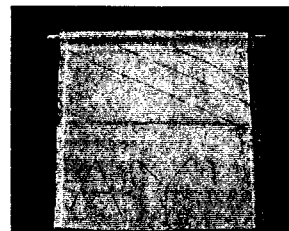
ミシンの操作を身に付けてから初めての製作であること、織布を扱うのも初めてであることを考慮して、3種類の作品の中から自分の製作する物を選ばせることにした。児童自身が作るものを自己決定できることで、製作に対する意欲や喜びを喚起できると考えた。ミシンによる直線縫いで作品が仕上がることで、布の特徴を理解できること、縫いしろの必要性が理解できること、しるしつけ、布端の始末の仕方、アイロンのかけ方などが習得できるという条件を共通に満たすものとして次の3点を製作作品とした。



＜ランチョンマット＞



＜ペーパーホルダー＞



＜ウォールポケット＞

○評価の工夫

・自己評価の視点の明確化

「学習カード」の自己評価項目は、学習のめあてや学習内容に沿って、評価規準に基づき、自己評価の視点を明確にした。視点を明らかにすることによって、児童が学習のめあてや学習内容のポイントを確認することができるようにした。

★自己評価★「ペーパーホルダー」

製作内容	製作の目標(できるといいな)	自己評価
(3) 布はしの始末をする	布はしをしるしどおりに折れた。	
	はしから5mm以内をまっすぐにぬうことができた。	
	返しぬいをすることができた。	
(発展コース) もようをぬう	工夫することができた。	
	もようをつけることができた。	

～自己評価のつけ方～ ○よくできた ○ たいへんできた △もう少し

事例 1

検証事項

- ・『自力解決プログラム』、『お助けカード』、視聴覚機器による指導の効果
- ・発展的な課題による学習意欲の喚起
- ・評価の工夫

(1) 小題材名 「ミシンにチャレンジ! - まっすぐぬおう! -」(6 / 7 時間)

(2) 本事例の研究主題に迫る手だて

自力解決プログラム

本時のめあて

- ステップ1 直線ぬいをしよう
- ステップ2 針目の大きさをかえてぬおう



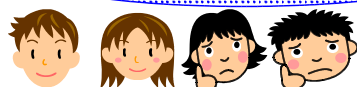
教師

課題の明確化

教師の指導1

教材提示装置を利用して直線縫いを実演しながら、手順を箇条書きで明示。

本時の学習内容をつかむ



児童A 児童B 児童C 児童D

困ったときその1
資料等を活用して解決

困ったときその2
相互解決

困ったときその3
教師と解決

本時のめあて(ステップ1)

直線ぬいができる

困ったときその1・2・3

発展的な課題(ステップ2)

針目の大きさをかえてぬう

資料の準備

- ・お助けカード
 - 下系のまき方
 - 下系のセットのしかた
 - 上系のかけ方
 - 下系の引き出し方
 - ミシンぬいのセットのしかた
 - ミシンが調子よくないときに確かめてみよう
 - 直線ぬいのしかた
- ・実物見本
 - 糸のセットしてあるミシン
- ・掲示物

教師の支援

- 予想されるつまずき
 - 上系や下系のセットができない
 - 釜に糸が絡まる
- 適切な資料の選択
- カードの見方
- 糸が釜に絡まった場合の援助

教師の指導2

- 予想されるつまずき
 - 資料を見ても、上系や下系のセットができない。
- ・つまずきを明確にし、目の前で実演したあと、再度取り組ませる。

評価1

評価規準 自分で糸をセットし、端から端までまっすぐに直線縫いができる。

評価2

評価規準 針目の大きさを変えて、端から端まで、まっすぐに直線縫いができる。

(3) 本時の学習

目標

- ・ミシンの操作に関心をもち、進んで身に付けようとしている。
- ・直線縫いができる。

展開

学習活動	予想される 児童のつまずき	教師の指導・支援 (○指導 ・支援)	評価と評価方法 (・評価 *評価方法)
・自力解決学習の手だてを確認する。 ・「今日のめあて」を知る。 ・「ステップ2 (発展的な課題)」を知る。		○「困ったときの1・2・3」の活用を指示する。 ○本時の課題を明示する。 ○発展的な課題を示す。	・本時の課題をつかむ。(知) * 学習カード
ステップ1 直線ぬいをしよう ステップ2 針目の大きさをかえてぬおう			
・から縫いを想起する。 ・実演を見る。 ・不織布で直線縫いを練習する。 ・完成したら教師に報告する。 ・本時を振り返り、「学習カード」に記入する。	・糸のセットの仕方が分からない ・糸が絡まる ・直線縫いのやり方が分からない ・下糸がなくなる ・資料を見ても理解できない ・友だちに聞いても理解できない	○教材提示装置を利用して、直線縫いを実演しながら、やり方を簡条書きで示し、手順を明らかにする。 ・つまずきに応じた「お助けカード」、掲示物、実物見本を見るようにうながす。 ・児童相互の学び合いをうながす。 ・ミシン縫いのセットの仕方から実演をそばで見せる。 ○個別指導では、理解できない部分は挑戦させ、理解できない部分は目の前で実演する。その後、再度取り組ませる。 ○課題解決の手だてと自己評価を「学習カード」に記入させる。	・進んでミシンの操作を身に付けようとしている(関) * 活動の様子、評価表、学習カード ・直線縫いができる。(技) * 練習用不織布 評価表、学習カード

(4) 考察

[指導法の工夫]

○ 『自力解決プログラム』の成果

本事例では、児童がつまずきを自力で解決できるような資料を準備し、「困ったときの1・2・3」の活用を毎時間設定して、学びの自立を定着化した。

その結果、「学習カード」の自力解決に向けてどのような手だてをとったのかを記録していく欄(1)や自由メモ(2)が示しているように、児童は、つまずいたときに、すぐに教師に頼るのではなく、資料等を活用して自力で解決しようと試みたり、児童相互の学び合いで解決しようとしている。このことは、実態調査の結果と比べると、大きく変わってきた部分である。「学習カード」によって、児童自身が自分の解決力の変化を実感することができたことも効果的であったと考える。

児童の変容

分からないときの
解決のしかたは?(%)

調査時期	手だて	資料などで調べる	友達に聞く	先生に聞く
実態調査時		12	55	29
本事例		31	61	4

○ 発展的な課題による学習意欲の喚起

発展的な課題を提示したことで、児童の意欲は高まり、「ミシンにチャレンジ!(7時間)」では、1~4次で74%以上、5~7次で30%以上の児童が発展的な課題を達成することができた。

本時では、全体の18%の児童が、発展的な課題を終えてから、さらに新たな課題「直角に角を曲がる」を自主的に考えて取り組んでいた。このことから、本時の発展的な課題は、針目の大きさをかえて直線縫いをすることだけではなく、角の曲がり方や曲線の縫い方の練習も取り入れた内容に改善することとした。

[教材・教具の工夫]

○ 「お助けカード」の成果

検証授業での児童の観察の結果、(児童像の)B児、すなわち『自力解決プログラム』の解決へのステップ「困ったときのその1」で解決した児童は、全体の18%であった。(児童像の)B児は、『上糸のかけ方』、『下糸の引き出し方』、『ミシンが調子よく



ないときに確かめてみよう』のお助けカードを活用して、ミシン操作のつまずきを自力で克服することができた。

（児童像の）C児、『自力解決プログラム』の解決へのステップ「困ったときのその2」で解決した児童は、全体の3%であった。児童のほとんどが「下糸の引き出し方」についてつまずいていた。児童は、お助けカードを活用しても十分に理解できなかったが、友達の実演を見て解決することができた。

（児童像の）D児、『自力解決プログラム』の解決へのステップ「困ったときのその3」で解決した児童は、全体の12%で、4名の児童が該当した。この4名の児童に対して個別指導を行ったところ、4名共に自分のつまずきの原因、つまり、「下糸の引き出し方」が分からないことを認識できていないことが分かった。

今後の課題としては、お助けカードの読み取り方の指導・助言を計画的に入れることと、自分のつまずきを判断する指導方法を工夫する必要がある。

また、ミシン操作の中で「下糸の引き出し方」が児童にとって特につまずきやすい学習内容であることが分かった。このことは、ミシン操作の指導において、大いに参考となる結果となった。今後は「下糸の引き出し方」についての指導方法の工夫・改善が課題である。

○ 視聴覚器機による指導の効果

実態調査の結果から、実演には視聴覚機器を積極的に活用した。

しかし、教材提示装置やVTRは、ミシンの全体像をつかみにくいなど欠点もあり、児童のそばで実演を見せる方が効果的な場合もあることが、児童のつまずきから分かった。今後は、映像と実演を組み合わせた製作方法の説明について工夫することが課題である。

[評価の工夫]

○ 自己評価「学習カード」の成果

本時の場合、（児童像の）A児が全体の67%、B児が18%、C児が3%であったことから、全体の88%の児童が、教師の個別指導を受けなくても、自力で課題を解決することができたという結果が得られた。

これは、『自力解決プログラム』の「困ったときの1・2・3」が定着したことと、「学習カード」で、評価規準に基づいた自己評価の視点を明確に示したことでの成果と考える。自己評価の視点は、授業の終末だけでなく、授業の始めや学習活動の途中において児童に意識させることによって、児童が学習のめあてや学習内容のポイントを確認したり、学習の見通しをもたせたりすることに役立ち、その結果、児童は、本時の学習活動への理解が深まり、めあての実現が容易になったと考える。

また、児童の実態調査から、多くの児童は、教師に認められ、ほめられることで、学習する満足感が得られることが分かった。そこで、「学習カード」の教師の助言では、児童の努力したことを具体的に認める言葉を記入するよう工夫したことも、児童の学習意欲を高める成果につながったと考える。（p16 4, 5）

事例2

検証事項

- ・『自力解決プログラム』の効果
- ・「お助けカード」「製作カード」の効果
- ・布端の始末の練習の効果
- ・3種類の作品から選択する効果

(1) 小題材名「ミシンでソーイング！ー覚えよう！布はしの始末の仕方ー」(1/5 時間)

(2) 本事例の研究主題に迫るための手だて

自力解決プログラム

本時のめあて

布はしの始末の仕方を覚えよう

ステップ1 [はしをほぐす、二つ折り(みみの場合)、三つ折り]

ステップ2 はしをほぐし二つ折りにしてミシンをかけよう

本時の学習内容をつかむ



児童A



児童B



児童C



児童D

困ったときその1

資料等を活用して解決

困ったときその2

相互解決

困ったときその3

教師と解決

本時のめあて(ステップ1)

布端のぬい方が分かる

[はしをほぐす、二つ折り(みみの場合)、三つ折り]

困ったときその1・2・3

発展的な課題(ステップ2)

はしをほぐし二つ折りにしてミシンをかける



教師

課題の明確化

教師の指導1

- ・実物投影機及び目の前での実演
- ・3種類の布端の始末の仕方を確認

資料の準備

- ・お助けカード(端をほぐす・二つ折り・三つ折りの縫い方)
- ・既習のお助けカード(ミシン、アイロンの扱いに関するカード)
- ・段階見本
- ・実物見本1

教師の支援

予想されるつまずき

- (1) 〈二つ折り・三つ折りの折り方が分からない〉
 - (2) 〈縫う位置が分からない〉
- ・適切な資料の選択
 - ・カードの見方

教師の指導2

予想されるつまずき〈資料が読み取れない〉

- ・つまずきを明確にし、目の前で実演し、再度取り組ませる。

評価1

〈評価規準〉布端をほぐしたり折ったりして、まっすぐ布の端を縫うことができる。

資料の準備

- ・お助けカード(端をほぐして二つ折りの縫い方)
- ・段階見本
- ・実物見本2

評価2

〈評価規準〉端をほぐして二つ折りにし、まっすぐ布の端を縫うことができる。

(3) 本時の学習

目標

- ・布端の適切な始末の仕方が分かる。
- ・製作の見通しをもち、自分が製作する作品を選ぶことができる。

展開

学習活動	予想される 児童のつまずき	教師の指導・支援 (○指導・支援)	評価と評価方法 (・評価 * 評価方法)
・「今日のめあて (ステップ 1)」を知る。 ・「ステップ 2 」を知る。		・前時の学習で使用した布見本 (みみ、たて、よこの表示の入ったもの) を黒板に提示する。 ○ 本時の課題を明示し、見通しをもって学習を進める。 ○ 個に応じた学習が進められるように発展的な課題 (ステップ 2) を示し、学習意欲を喚起する。	・ 本時の課題をつかむ。(知) * 観察
布はしの始末の仕方を覚えよう 〔ステップ 1 〔はしをほぐす、二つ折り(みみの場合) 三つ折り〕〕 〔ステップ 2 はしをほぐし二つ折りにしてミシンをかけよう 〕			
・ 3 種類 (端をほぐす、二つ折り、三つ折り) の始末の仕方を知る。 	 ・ 練習する順番をまちがえる。 ・ ミシンの操作ができない。	○ 実物投影機を利用し、3 種類の始末の仕方を実演する。 ○ 端をほぐす→二つ折り→三つ折りの順に練習することを知らせる。 ○ 「困った時の 1 ・ 2 ・ 3 」を活用させる。 ・ 実物投影機での説明が分からなかった児童を集めて、実演する。 ・ つまずきに合った「お助けカード」や掲示物を活用させる。	・ 進んで布端の始末の仕方を覚えようとしている。(関) * 活動の様子 * 評価表
・ 布端の始末を練習する。			

	・三つ折りの折り方が分からない。 ・縫いしろのどこを縫えばよいか分からない。 ・アイロンの使い方が分からない。 ・資料の内容が理解できない。 ・友達に聞いても分からない。	・理解している児童にやり方を見せてもらうようにうながす。 ・もう一度実演する。 ○個別に、分からないところを実演する。その後、再度取り組ませる。	・布端の始末ができる。(技) *活動の様子 *練習用布
--	---	--	---

作品作りの計画を立てよう

・自分が製作する作品を決める。 ・「学習カード」で本時の学習を振り返る。	・製作の見通しを持って、作品を決めることができない。	○実物大の作品見本を教卓に置く。 ○作品選びのポイントを伝えておく。(作品の作り方の違い、製作にかかる時間) ・作品の作り方やかかる時間の違いを参考にするように助言する。	・製作の見通しをもち、自分が製作する作品を意欲的に決めることができる。(関・知) *学習カード
---	--	---	--

いよいよ作品作りだ！
どうやって作るのかな？

○○○。



事例3

検証事項

(布端の始末の練習・「お助けカード」・「製作カード」・自力解決プログラム)の効果・自己評価の成果

(1) 小題材名 「ミシンでソーイング! - 作品作りに挑戦! -」(4/5時間)

(2) 本事例の研究に迫るための手だて

自力解決プログラム

本時のめあて

自分の学習計画を立て、製作しよう

ステップ1 布はしの始末をしよう

ステップ2 もようを工夫しよう

本時の学習内容をつかむ



児童A



児童B



児童C



児童D

困ったときその1
資料等を活用して解決

困ったときその2
相互解決

困ったときその3
教師と解決

本時のめあて(ステップ1)

布はしの始末ができる

発展的な課題(ステップ2)

工夫してもようをつけることができる



教師

課題の明確化

教師の指導1

- (1) 実物投影機・実物見本を使って
 - ・布端の始末の仕方を再確認する
 - ・模様の付け方を提示
- (2) 作品のグループ別に児童B・C・Dを集めて、作り方を確認する。

資料
の
準備

- ・お助けカード
- ミシンの操作の仕方
- 布端の始末の仕方
- ・実物見本 ・掲示物

教師
の
支援

予想されるつまずき

- (1) 下糸を引き出すことができない
- (2) 布の折り方が分からない
 - ・適切な資料の選択
 - ・カードの見方

教師の指導2

予想されるつまずき

- 作り方が理解できない
- つまずきを明確にし、それに適した指導をする。

評価
1

- (評価規準)
- ・布をしるしの通りに折り、はしから5mm以内をミシンでまっすぐに縫うことができる。
 - ・返し縫いをすることができる。

資料
の
準備

- ・お助けカード
- 手縫いによる模様の付け方
- 本返し縫いの仕方・ボタンの付け方
- ・実物見本
- ・掲示物

評価
2

- (評価規準)
- 工夫して模様を付けることができる。

(3) 本時の学習

目標

- ・ 本時の学習計画を立てることができる。
- ・ 適切に布端の始末ができる。
- ・ 工夫して模様を付けることができる。

展開

学習活動	予想される 児童のつまずき	教師の指導・支援 (○指導・支援)	評価と評価方法 (・評価 * 評価方法)
・ 本時のめあてを知 る。	自分の学習計画を立て、製作しよう [ステップ1 布はしの始末をしよう] [ステップ2 もようを工夫しよう]		
・ 本時の学習計画を 立てる。 ・ 各自の進度に合わ せて製作する。 ・ 本時を振り返り、 学習カードに記入 し、次時の学習の 見通しをもつ。	・ 自分の進度を考 えて計画を立て ることができな い。 ・ 布端の始末の仕 方が分からない。 ・ 製作カードの作 り方を読みとる ことができない。 ・ 下糸を引き出す ことができない。 ・ 返し縫いが分か らない。 ・ 本返し縫いが分 からない。	○ 実物投影機・実物見 本を使って布端の始 末の仕方を再確認す る。 ○ 模様の付け方(ステ ップ2)を提示し、 説明する。 ・ 本時が製作の3 / 4 であること、前時の 自分の進度を考えて 計画を立てることを 助言する。 ・ 「困ったときの1・ 2・3」を活用する ようにうながす。 ・ つまずきに合った お助けカードや掲示 物を参考にし、自力 解決できるように支 援する。 ○ 後半になってもつま ずきを解決できない 児童には、個別に目 の前で実演したり、 一緒にやってみる。	・ 本時の課題をつか み、学習計画を立 てることができる。 (知・創工) * 観察・学習カード ・ 各自の学習計画に 基づいて製作して いる。 [・ 布端の始末がで きる。 ・ 工夫して模様を 付けることがで きる。] (関・創工・技・知) * 観察・作品 評価表 学習カード

(4) 事例1及び事例2の考察

[指導法の工夫]

- 『自力解決プログラム』の成果
 - ・(児童像の) A児は、発展的な課題の提示により、製作への意欲が一層高まり、製作している作品に、より高い技術や工夫の成果が見られた。また、相互解決の場では、指導者の役割を積極的に担い、(児童像の) C・D児の質問に「お助けカード」を活用して教える姿が見られるようになった。
 - ・(児童像の) B・C児は、資料の見方や友達との相互解決の方法が定着し、自力で課題を解決しようとする力が身に付いてきた。
 - ・(児童像の) D児は、自分のつまずきを認識することができにくい傾向がある。したがって、個別指導では、始めに自分のつまずきは何なのかを明確にさせ、すぐに実演をするのではなく、「お助けカード」を使って指導するように改善した。その結果、教師の個別指導の後に、「お助けカード」を活用して製作する姿が見られるようになった。
- 「布端の始末の仕方の練習」の効果
 - ・小題材「ミシンでソーイング!」5時間計画の1次(事例2)に「覚えよう! 布はしのぬい方」を組み入れた。その結果、児童は、布端の始末についての知識や技能が確実に身に付き、事例3の授業では、90%の児童が適切に布端を始末することができた。
 - ・練習した布が個人の資料として活用できることで、児童は、その資料を活用して製作の見通しを立てることができ、作業の能率を上げることにつながった。

[教材・教具の工夫]

- 「お助けカード」・「製作カード」の成果と課題
 - ・児童のつまずきを 布の折り方が分からない 縫う位置が分からない と予測し、段階標本(カード)と実物見本(掲示物)をグループごと準備したことにより、事例2では70%、事例3では60%の児童が資料を活用し、利用度が高まったと考える。
 - ・事例2及び事例3では、児童の多くが布を折ることにつまずいていることから、布の折り方を理解することに役立つ立体的な段階標本と「製作カード」の図解の改善に取り組む必要がある。
- 製作する作品を3種類から選択させた効果
 - ・児童が製作する作品を選択することによって、「作りたい物を作る」という主体的な学習意欲が醸成され、積極的に学習に取り組む姿が見られるようになった。

[評価の工夫]

- 自己評価の成果
 - ・事例2・3では、評価規準に基づく自己評価の視点を、授業の始めや途中で確認するように指導方法を改善することによって、児童に、学習のめあてや学習内容のポイントを理解することに有効であることを一層認識させることができた。このことから、自己評価表である「学習カード」の活用は、授業の終末だけではなく、授業の始めや途中に有効に活用することで、より一層の成果が上がることが分かった。
 - ・授業の終末に自己評価をすることは、児童に達成感や学ぶ喜びを味わわせることができる。同時に、自分の分からないことやできないことについても気付かせることができる。この気付きが、毎時間の児童一人一人の課題を明確にし、『自力解決プログラム』による主体的な課題解決学習を一層充実させることにつながった。

研究のまとめと今後の課題

本研究では、「生活に役立つ物の製作」の中のミシン縫いの指導を通して、「確かな学力」を基礎的な知識や技能、自らの力で学ぼうとする意欲や学び方を身に付けることに焦点を当て、研究に取り組んだ。

そして、児童の課題解決の仕方を見直し、児童のつまずきを予測し、それに対応した教材・教具、評価の工夫・改善をし、研究の成果と課題を次のようにまとめた。

1 研究の成果

(1) 指導法の工夫

- 児童が主体的に学習を進められるよう構築した『自力解決プログラム』における「困ったときの1・2・3」を定着化させていくことにより、資料等を活用して自力でやり遂げることのできる児童が増え、主体的な学びへの変化がみられた。

そして、ほぼ全員の児童に基礎的な知識や技能を「おおむね満足の状態」で身に付けさせることができた。

一方、発展的な課題を提示したことで、全体的に児童の学習意欲は喚起されるとともに、より高い知識や技能を身に付けたいと思っている児童の充実感を満たし、個を生かす指導を充実させることができた。

(2) 教材・教具の充実・工夫

- 児童のつまずきに対応した資料やカードを準備したことにより、基礎的な知識や技能の定着に効果が上がった。また、つまずいたときには、安易に教師や友達に頼り解決していた児童の姿を、自らの力で主体的に取り組む解決方法を目指す児童の姿に変容することができた。

(3) 自己評価の工夫

- 評価規準に基づいた自己評価の視点を明確化した「学習カード」の作成や活用方法を工夫したことで、児童は、学習のめあてや学習内容のポイントを適切に把握することができ、学習の見通しをもつことができるようになった。また、自分の課題が明確になることで、次の課題の解決方法においても見通しをもつことができ、主体的な学びを一層充実させることにつなげることができた。

2 今後の課題

- 資料やカードを見ても理解できない児童や、何につまずいているのか分からず課題解決ができない児童に対して、課題に気づく力を身に付けさせる指導法の工夫と、学習のつまずきの分析を継続していく必要がある。また、児童の意欲を高め、技能を伸ばす発展的な課題についても研究を深めたい。
- 家庭生活の現状としては、ミシンを使って衣服等を製作したり補修したりすることが少なくなっている状況がある。そのため、家庭生活でのミシンの実践については、消極的に考えざるを得ない面がある。また、中学校での家庭分野の内容の取扱いから、今後必修で学習するとは限らないことも予測される。このような状況を踏まえて、小学校家庭では、ミシン縫いの学習を衣服を適切に選択するための基礎的なスキルとしてとらえ、確実に指導する必要性があると考え。

今後は、これからの衣生活の動向を見つめながら、年間指導計画の中の位置づけや、実生活の中でどのように生かしていくかについて、さらに研究を深めたい。

平成 1 6 年度 教育研究員名簿

区市町村名	学 校 名	氏 名
江 東 区	元 加 賀 小学校	藤 澤 優 子
杉 並 区	高井戸第二 小学校	天 野 里 英
荒 川 区	峡 田 小学校	○山 田 敦 子
練 馬 区	光 和 小学校	栗 林 三代子
国分寺 市	第 六 小学校	臼 井 美 佳

世話人 ○副世話人

担当 東京都教職員研修センター 指導主事 長南 良子
指導主事 富川 麗子

平成 1 6 年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成 1 6 年度 第 2 1 号
(東京都教育委員会主要刊行物)

平成 1 7 年 1 月 2 4 日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒 1 - 1 - 1 4
電話番号 0 3 - 5 4 3 4 - 1 9 7 4

印刷会社名 鮮明堂印刷株式会社